



太工通信

令和3年度 第12号

野球部 関田兄弟

青春譜

五回、2番五箇勇太選手（3年）の三塁打で二塁から弟の関田純大選手（同）が生還すると、先に本塁を踏んでいた兄の悠希選手（同）が見守っていた。得点した2人の走者は双子の兄弟。2点差に迫り、追撃ムードが高まる中、兄弟は「いける」と視線を交わした。

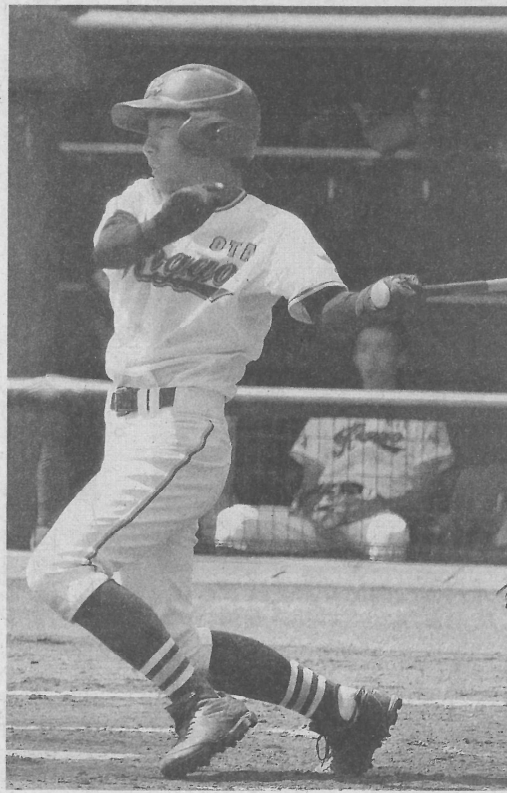
一卵性双生児で、「見た目も違えば、性格も真逆」のんびりやでマイペースな兄と快活でせっかちな弟。その2人を結びつけてきたのが野球だった。

小1で始めてからずっと

双子の兄弟 つないだ野球

同じチームでプレーし、休日には2人でバッティングセンターに行ったり、キャッチボールをしたりするのが日常だった。

チームでは兄が左翼手で、弟が遊撃手。弟がエラーをすれば、兄が拾い、どちらかが打席に立てば「全



関田純大 選手

（太田工3年）

力でいけ、楽にいけ」と励まし合ってきた。

この試合で、兄弟はチームの4安打のうち3安打を放ったことを勲章に、ひとまずの区切りを迎えた。2人は「兄弟で野球ができて本当に良かった」と口をそろえた。（弓立美沙輝）